

- 展望台

エレベーターのドアが開く。慌てて降りてくるきなこ
あたりを見回すが誰もいない。
きなこ「(咳く)ホイさん」

- 香港警察国際課

デスクの周りに部長と、趙
部長「展望台の発砲事件はどうなってる？」
趙「発砲したのは、テロ組織の男らしいです。」
パソコンの画面に映し出されるデータ
部長「狙われたのは、また1211か、ここのところ発砲事件が頻繁に起こっているが...」
趙「まだ、詳しい情報は入っていません。」
部長「李はどうした？」
趙「現場だと思えますが...」

- 倉庫前(夜)

止まっているバイク前に立つ李、バイクに凭れて地面に座っている凱歌
李「どうやらあなたには2つの選択肢しかないみたいね。」
凱歌「...」
李「組織に戻るか、殺されるか...どっちがいい？」
凱歌「...」
李の携帯が鳴る、
李「(携帯に)はい、わかりました。すぐ向かいます。(凱歌に)仕事に戻るわ。」
立ち上がる凱歌。バイクに跨り、バイクを発車する李、すぐに、止め振り返る。
李「あ、忘れてたわ、これ、(携帯を取り出し、凱歌に投げる。凱歌、受け取る。)プレゼント。
後で連絡するわ。それまで、...生きててね。」

- テロ組織RDアジト

デスクに座るリーダー、前に立つ男A
リーダー「また、失敗か。」
男A「すいません。邪魔が入りました。」
リーダー「まあいい。奴が1211に戻る前に、始末しろ。邪魔をされると厄介だ。」
男A「わかりました。」

- 香港中華料理店厨房

おかゆを、器に盛っている店主の楊、テーブルに凱歌
楊「元は、夕べ、また帰ってこなかったようだな。ほら(テーブルの上におかゆを置く)」
凱歌「すいません。(匂いを嗅いで) いい匂いだ...懐かしい... (一口食べて) 美味しい！」
楊「余り物だけど、スープも飲むかい？」
凱歌「頂きます。」
楊、スープを凱歌の前に置くと、凱歌の前に座る。
楊「で、日本でお母さんには、会えたのかい？」
凱歌「はい、一度だけ...」
楊「それは、よかった。お母さんは、元気だったかい？」
凱歌「...心が悪くてずっと入院してたんですが、そろそろ退院できそうだって...」
楊「そうかい...」
凱歌「...でも、...逢わない方がよかったのかもしれない...」
楊「...」
凱歌「かえって、母を苦しめただけじゃないかって...」
楊「(立ち上がって凱歌に近寄り肩を叩く)お母さんは、お前に逢えて嬉しかったに違いないよ...」
凱歌「...」

- 病院内

退院の準備をする市江、雁太郎、美智、はな
美智「ほんと、よかったわね、退院ができて。」
市江「皆さんには、何もかもお世話になってしまって...」
美智「いいんですよ、そんな事、ね、雁太郎。」
はな「でも、ホイさん今、香港でしょ？いつ日本に戻って来るのかな。退院したって知らせたら、喜ぶだろうな。知らせる方法ないのかな...あつ、お姉ちゃんなら解るかも！お姉ちゃんね、今、香港にいるのよ。」
市江「そうなんですか。」
はな「今頃、二人、逢ってたりして。」
顔を見合わせる雁太郎と美智
市江「あの、きなこさんは、どうして、結婚なさらなかったんでしょう？私の息子の事が、何か問題にでもなったのでしょうか？」

雁太郎「きなこの事は息子さんとは関係ありませんよ、おかあさん。...あいつは、家事もできねえし、奥さんなんて柄じゃない。犯人を追っかけたドンパチやってる方が性に合ってるんでしょう。それで、結婚なんて面倒くさいことが嫌になっちゃったんですよ。まあ、あんなのを嫁にしなくて、船木さんも、正解だ。」

美智「もう、雁太郎たら、余計な事ばかり言って...」

- 香港中華料理店厨房

仕込みをしている楊、横で見ている凱歌。元が入ってくる。
入り口で、凱歌を見つけ、くると、踵を返してから、振り向く。
元「また、お前か！なんで、ここにいるんだよ？もう、また、ぼろぼろになっちゃって...」
凱歌「(服の汚れを払いながら)お前が顔出せて言っただろう？」
元「言ったよ、言ったさ、でもな、(凱歌に近付き、耳元で)昨日、ビクトリアピークで、RDとやりあっただろう？」
凱歌「俺は、何もしていない。」
元「だから、お前が何もする気がなくなつて、行くところ、行くところで大騒ぎだ。全く、お前の存在自体が迷惑なんだよ！」
凱歌「...」
楊「馬鹿息子、お前の方が、よっぽど社会のゴミだろうが！」
楊、元の頭を叩く。
元「いってーよ！もう、うるせーなー、くそ親父！(凱歌に)...すまん、言い過ぎた...」

- 病院前

タクシーを待つ、市江、雁太郎、はな。入り口から美智がでてくる
美智「タクシーすぐ来ますって。」
市江「いろいろすみません。」
はな、身を乗り出して試している。
はな「あ、あれかな...」
タクシーが止まる。中から数人の男達が降りてくる
驚く、4人、身構えるはなと雁太郎。美智、市江を守るために傍による。
はな、格闘シーン、
美智、市江を連れて病院内に入ろうとする。
拳銃を持った男が中から出てくる。
立ち竦む、美智と市江
男「そこまでだ。」
市江の腕を掴むとタクシーに乗り込む。
呆然と見ている3人、タクシー走り去る。

- ホテルの廊下

ぼんやりと考えながら歩いてくるきなこ
- 回想 展望台のエレベーター
(凱歌、きなこをエレベーター内に押し込む。)
部屋の前に座り込む人影を見て、身構えるきなこ
立ち上がる凱歌
きなこ「ホイさん！」
頷く凱歌

- ホテルの部屋(夜)

向き合ってソファーに座る凱歌ときなこ。テーブルの上に資料
凱歌「(写真を見ながら)この男は知らない。」
きなこ「1211の日本の窓口になっていたのよ」
凱歌「アジトをつぶしてもすぐに、代わりができる」
きなこ「こっちが、(別の資料を見せる)昨日あなたを狙った男。テロ集団RDの一員らしいわ。まだ捕まってない。また、狙われるかもしれないわ。ねえ、どうなっているの？」
凱歌「わからない。組織同士の対立に巻き込まれているらしい。」
凱歌、立ち上がって、窓の外を見ている。
きなこ「また、そんな顔してる。」
凱歌「(振り向いてきなこを見る)？」
きなこ「寂しそうな顔...一緒に日本に帰りましょう...そうすれば、お母さんにも会えるし...抗争に巻き込まれることもなくなる...」
凱歌、きなこに背を向ける。
凱歌「...苦しいんだ。君といると。君の事を思うと...ずっと、考えてた。君とまたいつか逢えたら、って...日本にいた時も、こっちに来てからも。考えちゃいけないと思うのに、そんな事ばかり...」
きなこ「ホイさん...私もよ。あなたの事ばかり思ってた。すごく、苦しかった...」
凱歌「また逢えて嬉しかった。...だけど、1211は、死ぬまで僕を自由にしない。...僕は君といてはいけないんだ。僕と一緒に居ると、君だっていつ狙われるか...」
きなこ「...」

凱歌 「わかっているのに...(俯きながら) 僕は、...君を幸せにできない。」

きなこ、後ろから凱歌を抱き締める。

きなこ「そんな事言わないで...私もあなたに逢えて嬉しかった。ずっと、...ずっと逢いたかった。」

凱歌、きなこの廻した両手を解き、きなこに向き直る。

見詰め合う凱歌ときなこ、凱歌、きなこを抱き締める。

きなこ、顔を上げ、凱歌に唇を合わせる。

- ホテルの部屋

朝日を浴びる、きなこの寝顔。見つめる凱歌、部屋を出る。

- 部屋の前

そっとドアを締める凱歌、振り向くと李が立っている。

- 中華料理店前

店を出る元、自転車の止まる音に振り向く。

店の前に止まる自転車、降りた男、走り出す。元にぶつかるがそのまま横を走り去る。

元 「なんだよ、いってーな！おい、待て！」

- ホテルの部屋(李)

椅子に座る凱歌、前に立つ李

李 「この前の件、決心はついたの」

凱歌「...」

李 「そんなに、いい腕を持ってるのにどうして？あなたは天才よ、才能は、使うためにあるのよ。

あなたの目的のためにもね。」

凱歌「約束した...もう、人は撃たない...」

李 「彼女と...」

凱歌「...」

李 「本気なのね。...でも、わかってる筈よ。彼女とはどうにもならないわ。あなたに愛されても

彼女は不幸になるだけでしょう。命を落とすかもしれないわ。」

凱歌、立ち上がり李を睨む。

凱歌「彼女は俺が守る。」

李 「ホントに愛してしまったのね。可哀相に...なんなら、私が忘れさせてあげましょうか」

李、王の頬を撫で、首に手を廻す、顔を寄せる。凱歌、李の腕を掴み捻ってベッドに投げる。

凱歌、部屋を出ようとドアへ向かう。

李、凱歌に向かい枕を投げる。

李 「冗談に決まってるでしょ！」

凱歌さっとよける。ドアにぶつかり落ちる枕

凱歌、後ろ向きに枕を蹴る。元の場所に枕が落ちる。

- 中華料理店前

歩いている元。店の前の自転車が爆発する。

振り返る元、店に向かい走り出す。

元「どうなってんだよ...」

店の部分がめっちゃめちゃに壊れている。

元「おやじ！おやじ！」

- ホテルの部屋

李の携帯が鳴る。ベッドから降り電話を取る李。

李「もしもし、あー、元」

凱歌が部屋を出ようとするのを手で制する李。

李 「爆発した？店が！」

凱歌「(振り向き、李に駆け寄り)爆発？」

- 中華料理店厨房

電話をする元、横に頭を抑えて蹲る楊、額に傷、血が出ている。

元 「もう、店がめっちゃめちゃだ。おやじ？ああ、厨房にいたから何とか無事、

(楊の額を見て)落ちて来た鍋で、頭打ったらしいけど...たいした事ね - な。」

- ホテルの部屋

李 「わかったわ。すぐそっちに行くわ。」

凱歌「無事なのか？」

李 「大丈夫、楊のおじさんも元も無事よ。店はめっちゃめちゃらしいけど。たぶん、R Dでしょ。」

凱歌「...昨日、おやっさんに会ったんだ。...おかゆをご馳走になった。」

李 「そう」

凱歌「...元の言ったとおりだな。」

李 「何が？」

凱歌「俺の存在自体が迷惑だって...」

李 「(凱歌を見つめて)本心じゃないわ。」
凱歌 「(首を振る)釈放なんて、望んでいなかった...」
李 「自由が嬉しくないの？」
凱歌 「自由？外に出たって、俺に自由なんてない。」
李 「でも、彼女に逢えた。」
凱歌 「(李を見つめてから寂しげに視線を落とす。)俺は...みんなを不幸にするだけだ。」
凱歌、ドアに向かう。
李 「自分の置かれた立場から目をそらさないで。」
凱歌、ドアノブを廻す。
李 「忘れないで、王凱歌。あなたは、スナイパーよ」
部屋を出る凱歌。

- ホテル地下駐車場

歩く凱歌。後ろに1211の男達、後ろから凱歌に飛び掛る、応戦する凱歌
敵を蹴って着地し、顔を上げる。凱歌の前方に立つコー。

- ホテルの部屋

目覚めたきなこ、凱歌がいないことに気付く、
きなこ「ホイさん?...ホイさん！」
ベッドを素早く出るきなこ。

- ホテル地下駐車場

コー 「女と別れは済んだのか？」
凱歌 「...」
コー 「逃げ切れると思っていたのか。」
コー、跳躍し凱歌の前に着地する。胸を押す。吹っ飛ばす凱歌。
倒れた凱歌、上半身を起こし見上げると凱歌の目の前にコー。凱歌の顔先に写真を突きつける。
一瞬驚いてからコーの顔を睨む凱歌。
コー 「とにかく、組織に戻れ、話はそれからだ」
立ち上がる凱歌、コーの後ろに従う。
きなこの声「ホイさん！」
後ろに駆け込んで来たきなこ
一瞬立ち止まる凱歌、そのまま歩き出す。
きなこ「行ってはダメ」
追いかけてやめようとするきなこを1211の男達が抑える。
コー、車のドアを開ける、促されて乗り込む凱歌
きなこ「ホイさん！戻っちゃダメ！」
周りの男を振り払って駆け出す
走り出す車、きなこ、後を追うが車は走り去る。

- 警視庁 国際2課

電話をうける船木。
船木「あっ、お父さん、ご無沙汰しています。えっ、連れ去られた、はい、はい、
場所は、病院前、わかりました。すぐ緊急手配します。」
電話を置く船木
船木「王凱歌の母親が、病院前から何ものかに誘拐された、緊急手配頼む。」
刑事「誘拐された？はい。わかりました。」
刑事「1211の仕業でしょうか？王凱歌を組織に戻そうとして...」
船木「わからん、しかし、また、誰かを狙撃させようとしているのか...」

- 香港警察

デスクにてPCの画面を見ながら、趙と打ち合わせをするきなこ
きなこ「1211の本部が何処にあるかまだわからないんですか？」
趙 「香港で闇社会の抗争が激化しています。香港にボスが戻っている事は掴んでいるんですが。」
きなこ「ボスは香港にいます。コー村木が、王凱歌を連れ去りました。狙撃をさせるかもしれません。」
趙 「わかりました。その件について捜査させます。」
きなこ「お願いします。」
電話が鳴る。
趙 「はい、お待ちください。(受話器を渡しながら)君にだ。」
きなこ「私?(受話器を受け取り) あっ、船木課長、はい、何ですって！誘拐？いつですか。」

- 警視庁 国際2課

電話をする船木
船木 「昨日の午後だ。緊急配備したが、ひっかからなかった。」
きなこ(声)「国外には出ていないんですか？」
船木 「空港と港は抑えているが、まだ行方は掴めない。」
きなこ(声)「課長、...王凱歌が1211に連れ去られました。」
船木 「如何いうことだ...違ったのか？」

- 香港警察

きなこ「...街で偶然会いました...コー村木が香港に潜伏していました。(回想、地下駐車場)」
船木(声)「わかった。また動きがあったら連絡してくれ。」

- 1211本部

倉庫のような薄暗い部屋の中、後手に縛られ、床に倒れている凱歌。
周りに数名の男達、一人が凱歌の腹部に蹴りを入れる。
男1「お前のせいで、何人の仲間が殺やられたと思ってるんだ！」
男2「(蹴りながら)ボスがお前に甘いからって、いい気になるなよ！」
数名に蹴られ、蹲る凱歌。
コー、部下を連れて入ってくる。
コー「誰が、こんな事をしると言った。」
コー、男達を平手で次々と打つ。倒れる、男達
部下が凱歌を立ち上がらせ、後手の紐を解く。
コー「(凱歌に)大丈夫か？」
凱歌の口の端が切れて血が滲んでいる。コー、指で凱歌の血を拭う。
冷たい目でコーを睨む凱歌。
コー「後で訓練所に行け。腕が見たい。」
コー、出て行く。
男1「(凱歌に囁く)お前が使い物にならなかつたら...覚悟しとけよ。」
凱歌、男1を見る。

- 香港警察

きなこ、PCの前で報告書を打つ。
部屋に顔を出した配達員がきなこに話し掛ける
配達員「李美麗刑事はいますか？」
きなこ「(広東語でわからない)?」
配達員「いないの」
配達員、怪訝そうにきなこを見て、郵便物を李の机の上に置く。
きなこ、配達員の言葉に引っかかりを感じる。

- 回想

元「こないだ、李美麗と一緒にだったからてっきり」

きなこ「(呟く)李美麗」
立ち上がる、きなこ。李の机の郵便物を手に取る。宛名を見る。慌てて出て行く。

- 香港繁華街

走るきなこ、爆破された元の店の前、捜査員が出入りしている。きなこ、店内を覗き眉をひそめる。
警官と話をしている元に気付き、駆け寄りきなこ。警官、立ち去る。
きなこ、元に写真を見せ辞書を片手に片言の中国語で聞く。
きなこ「すみません。聞きたい事があるんですが、王凱歌はこの人に会っていましたか？」
元「あー？」
きなこ「わからないかな、えーと(中国語)王凱歌は」
元「あんた、凱歌と一緒にいた女か、日本人か？」
きなこ「日本語話せるの？」
元「俺、親父が横浜の中華街に仕事で呼ばれた時、一緒に行ってたからな。」

- 料理屋厨房

厨房に立つ、きなこと元
きなこ「こっちは無事なのね」
元「おかげで親父も命拾いさ...惜しかったな~。くたばりゃ、この店は俺のもんだ。
料理屋なんか止めて、クラブにすんものにな~。」
きなこ「ねえ、こんな時に悪いんだけど...王凱歌が1211に連れ去られたの...
どこにいるか教えて欲しいの。」
元「1211に...」
きなこ「何か、知ってるんでしょ？」
元「いや、知らない...俺、昨日あいつに酷い事言っちゃって、悪かったと思ってさ、
探そうかと思ってたら...ドカーンだ...やっぱ疫病神かな...なんてね...」
きなこ「昨日、彼に逢ったの？」
元「店に来たのさ。親父に会いに来たのかな、まあ、他に行くともなかつたんだろうが...
ピクトリアピークの発砲騒ぎの後でね。」
きなこ「そうだったの。ねえ、やっぱり、彼と関係があるからここが狙われたの？」
元「まー、確信はできないけど、99%ぐらいはそうかな~。」
きなこ「...」
元「(きなこの顔を見て)別に、あんたがそんな顔しなくてもいいよ。」
きなこ「ねえ、李刑事と凱歌は如何いう関係？凱歌の取調べを担当してたって、聞いてるけど...」

元 「李ならさっきまで来てた。凱歌の事は何も言ってなかったな...そういや、それも変だな...」
きなこ 「？」
元 「確かに李は凱歌を探してた。俺に会うと、必ず凱歌の事を聞いたのに...そっか。」
きなこ 「勝手に納得しないで、わかるように言って。」
元 「だからさ、この前、ほら、あんた達にあった日の2日ぐらい前かな、
ここで、凱歌と李が話し込んでたんだ。李が凱歌に何か頼んでるみたいだったな。」
きなこ 「彼は何か言ってなかったの？」
元 「あいつは、いつの間にかいなくなってたな。李も凱歌も、俺には何も教えてくれない。
でも、「組織に戻れ」って言うてるのを聞いたんだ。だから、やっぱ、戻ったんだなって...
李もそれを知ってただろう。だからもう俺に凱歌の事を聞かない。どうよ、納得？」
きなこ 「(首を振って)全然わからない。」

- 1211訓練所

狙撃場で、凱歌と数名がライフルで射撃訓練をしている。的を狙いライフルを撃つ凱歌、
中心部に命中。横にコーが、やって来る。
コー 「腕は鈍っていないようだな。」
凱歌、次々と現れる的の中心を確実に撃ち、全て中心に命中させる。
コー 「お前の身体に流れている血が騒がないか？ターゲットに標準を合わせ、それを打ち抜いた時
お前は、快感を感じないのか？その手は、その目は、獲物を探しているんだ。そうだろう！」
コー、凱歌の肩に手を置く。
凱歌 「(手を振り払って)そんなことはない。」
コー 「お前は、闇の世界でしか生きられない。自分でも気付いたんじゃないのか？」
凱歌 「...」
コー 「俺がいなくなっても、この組織は動きつづける。1211が消滅したとしても、また、新たな
闇の組織が取って代わるだけだ。だったら、自分の手でこの世界を動かしたいと思わないか？」
凱歌 「思わない。」
凱歌、現れた的を撃つ。

- ゲームセンター(夜)

きなこ格闘ゲームをしている。
元が遊んでいる男数人に話を聞いている。
きなこ負けて悔しがっている。戻ってくる元
きなこ 「何か、わかった？」
元 「凱歌が組織に戻ったら、RDのリーダーの狙撃をさせるんじゃないかって噂があるらしい。」
きなこ 「えっ？(音がうるさくて聞こえない)」

- 警視庁 国際二課

電話をする船木
船木 「ということは、もう出国したと言う事ですか？わかりました。」
電話を置く船木。
船木 「誘拐された島村市江がすでに出国した。」
刑事 「香港でしょうか？」
船木 「香港警察に確認を取ってくれ」
刑事 「わかりました」

- 病室

ベッドで眠る市江、傍に見張りの男

- 紅龍店内(夜)

厨房に雁太郎、店に座る美智
テーブルを片付けている牛田
美智 「お母さん、まだ見つかっていないのかしら、船木さんから何の連絡もないし...」
雁太郎 「船木さんは、一生懸命探してくれているさ。」
美智 「身体、大丈夫かしら、もう、やっと退院できたって言うのに。」
はなが帰ってくる。
はな 「ただいま。ねえ何か連絡あった？」
首を振る美智
はな 「あー、もう、警察は何やってるの！ねえ、お姉ちゃんからも何も連絡ないの？」
牛田 「きなこさんも、お母さんの誘拐の事は知っているんですよね。」
美智 「もう、きなこも、きなこよ。電話ぐらいくれればいいのかね。」
雁太郎 「きなこだって、いろいろ忙しいんだろうよ。」
店内に船木が入ってくる。
はな 「あっ、船木さん」
船木 「どうも、ご無沙汰してます。」
美智 「今ね、ちょうど話をしてたんですよ、船木さん。お母さん、見つかりました？」
船木 「いえ、ただ...香港にいることが確認できました。」
はな 「えっ、香港？」
牛田 「きなこさんが行ってる所ですね」

美智 「そんな遠くに連れて行かれて、お母さん大丈夫かしら？無事なんですか？」
船木 「わかりません。とにかく、私も明日、香港に向かいます。」

- レストラン個室

部屋に入ってくる、コーと高官、双方の警備が警護している。

ドアの横に立つ凱歌。

コー「(凱歌を見ながら) 彼が王凱歌です。おかげで、組織に戻りました。」

高官「ほう、君が。(握手をしようと手を出す。凱歌、応じない)」

コー「(凱歌に) もういい、行け。」

凱歌、部屋から出て行く。

高官「天才スナイパーか。なかなか、気難しいな。まあ、これで、1 2 1 1も安泰と言う訳だ。」

コー「彼には、これから存分に働いてもらいます。」

- おでんの屋台(夜)

並んで座る雁太郎と船木

雁太郎「ホイさんとね、約束したんですよ。お母さんのことはまかせとけて、だから...こんな事になっちまって...」

船木「大丈夫です。誘拐したのが1 2 1 1なら、決して市江さんを傷つけることはないと思います。」

雁太郎「つまり...(船木の顔をじっと見る)ホイさんが、組織に戻されたって事ですか...」

船木「お父さん...」

雁太郎「きなこは、この事を知ってるんですね。」

船木「(頷く)...」

雁太郎「こんなこと船木さんに頼めた義理じゃないんだが...きなこをお願いします。あいつがね、無茶するんじゃないかと、つい、心配になっちまってね...」

船木「彼女は私の部下ですから。」

雁太郎「八八、わかってるんですがね。あいつはね、自分の信じた道を通って行く...誰にも止めらりゃしないってね...全く、誰に似ちまったのか(酒をぐいとのみ干す)」

- 香港、クラブ(夜)

フロアで踊る人々、テーブルにきなこ元、きなこ、グラスをぐいと飲み干す。

きなこ「王凱歌を止めたいの。」

元「あんた、なんでそんなにあいつに拘るんだ」

きなこ「それは...」

元「(きなこを見つめて)ま、いいさ。俺は、昔あいつに助けられたんだ。薬に手を出して、売人にされちまって、どじ踏んで殺されそうに成った時に、あいつ、一人で俺を助けに来てくれた。あの店だって、あいつに守ってもらったようなもんだしな。

...だから、何があっても、あいつの事は、裏切れないんだ。」

きなこ「お店の事はいいの？あんなにめっちゃめっちゃになつて...」

元「あんな古臭い店、ちょうど改装できて、かえって、よかったのさ。でも、...あいつの方が、気にしてるのかもな...あの店を気に入ってたから...」

きなこ「...」

男が2人、元に声をかける。

男1「元、元だな！お前、こんな所によく顔出せたな。」

男2「この前のお前の情報、がせもいいとこだ。こっちは酷い目にあつたんだぞ！」

男1「(元の肩に腕を廻し) どうしてくれんだよ。この落とし前は！

(きなこに) あんた誰？いい姉ちゃん連れてんじゃねえか。」

きなこ、言葉がわからず首を振る。

元「(振り払って) もう、話は後でな。連れがいるんだから」

男2「利いた風な口、叩くんじゃねえよ！」

男2、ビール瓶を叩き割り、元の襟首を掴んで、引きずり出そうとする。

男1「さっさと来やがれ！(きなこの腕を掴み) 悪いな、一緒に来てもらおうか。」

きなこ「だから、何言ってるのか、わかんないって、言ってるでしょ！」

きなこ、男1の腕を捻って投げ飛ばす。襲ってきた男2も蹴り飛ばす。

慌てて、男2人去る。びっくりしてきなこを見ている元

元「あんた、強いな。」

きなこ「どうせ、後ろめたい事ばかりしてるんでしょ？」

元「いや、(向き直って、グラスを飲み干す。) あいつらはちょっとね...でも、助かった。あんた、強いわ。李もかなり強いけど...李美麗は幼馴染だったんだ。両親が事故で亡くなって、この街出てってからは、会ってなかったけどな。また会った時にはあいつは刑事だったのさ。」

きなこ「それで、彼女に情報を流してたの？」

元「まっ、そんなとこだ。李の弟はテロで死んでるんだ。」

きなこ「テロで！」

元「そうだ。可愛がっていたからな、たった一人の家族だったのに...李はそれから変わっちゃった。捜査が荒っぽくて、なんか、危なっかしくて...。奴等を憎んでるだろうな。」

きなこ「そうだったの...」

- レストラン化粧室

歩いてくる凱歌、後ろに男が従う。

中に入る凱歌、男は入り口に立つ。

化粧室内、鏡の前の凱歌。鏡の中、凱歌の横に李が現れる。

李「決まったの？」

凱歌「いや、まだ、コーから話はない。」

李「R Dは、近いうちに動くわ。」

凱歌「わかった。...母を頼む。」

李「そうね。抗争に巻き込まれでもしたら大変だものね。そっちの件はまかせて。」

鏡の中、凱歌を見つめる李。目をそらす凱歌、自分の手を見ている。

- 車中(夜)

座席に座る高官と趙

高官「1211は巨大化し過ぎたな。」

趙「確かに。」

高官「ここで、少し叩いておかんとな。」

- 路上(夜)

歩く、きなこと元。すれ違う車を見るきなこ。

きなこ「あれは、趙刑事。」

元「知り合いか？」

きなこ「たぶん...」

元「あれ、VIPの高級車だぞ。すっげー」

きなこ、首をかしげて考えている。元、きなこの腕を掴んで、看板の陰に引っ張る。

きなこ「何よ！」

元「静かに...李だ。」

きなこ「えっ」

影から覗くきなこ。李がタクシーに乗り込み走り去る。

元「何処に行くんだらう...」

きなこと元タクシーの行く先を見ている。

きなこ「どーでもいいけど、いつまでくっついてんのよ」

元「あっ、すまん」

元、きなこから慌てて離れる。

元「じゃ、俺...ここで、」

きなこ「遅くまで、付き合わせちゃってごめんね。いろいろ、ありがとう。助かったわ。」

元「いや、いいんだ。どうせ、暇だしな。凱歌、見つかるといいいな...」

きなこ、頷く。元、手を振って去る。歩き出すきなこ。

- コーの部屋

机の前に立つコーと凱歌

コー、凱歌に書類を見せる。

コー「今爆弾テロを繰り返してるテロ組織R Dのリーダーだ。お前の仲間が何人もやられている。」

凱歌「...」

コー「このまま、奴等のをさばらせておくわけにはいかない。奴等は資金調達に裏社会に食い込もうとしている。外国企業との武器取引に関する我々の利権を奪おうと躍起になっている。」

凱歌、壁の写真を見る。5人の男達が写る古い写真。

コー「それが、1211の創設メンバーだ。中央で権力の座を追われた者、密告で地位を剥奪された者、貧困から這い上がろうとした者、皆、表社会から追われ、闇で権力を握った者達だ。

その左端が、私の叔父だ。元は軍の幹部だったが、訓練中に不慮の事故で負傷して、除隊した。

天才的な狙撃の腕前を持っていたらしいが、私にはただの優しい叔父だった。

彼の後を継いで今の私があるわけだ。」

凱歌「...」

コー「ところで、お前は昔から組織の事を何も知らうとしなかったらしいな。

この組織の中で、権力を手に入れたと思った事はないのか？」

凱歌「興味がない。」

コー「まあいい。仕事はきっちりやってもらおう。決行は、明日。(凱歌に書類を渡す)

チャンスは、一度限りだ。奴は香港を離れ、某国で武器取引の利権を握るための

密約を結ぼうとしている。この密談が成功すると我々もかなりの打撃を受ける。

狙撃場所は随時連絡する。」

凱歌「(受け取った書類を見ながら) 母は、どうしている？」

コー「元気にしているさ、お前がいい子にしていればな...」

コー、凱歌の肩を叩く。凱歌、部屋を出る。

- 香港警察廊下

きなこ、各部屋を覗いて、李を探す。
趙と一緒に歩いてきた呂にぶつかる。
呂 「円道寺さん、如何したんですかそんなに慌てて。」
きなこ「あっすいません。呂刑事、李刑事を見ませんでしたか？」
呂 「彼女ならさっき地下の資料室に降りていったけど...」
きなこ「ありがとう。」
行こうとしたきなこ振り返り、
きなこ「そう言えば、趙刑事、昨日...」
趙 「何か？」
きなこ「いえ、あの...なんでもありません。」
歩いて行くきなこ、怪訝な顔で見送る趙

- 香港警察資料室

そっとドアを開けるきなこ
中から話し声
李の声「狙撃の決行時間は？ ええ、わかった。...それは大丈夫、奴等と関係がある病院ちゃんと見つけたわ。」
背中を向けて棚の後ろに立つ李
きなこ「誰と話してるの？」
驚いて振り向く李
李 「あなたには関係ない人よ、円道寺さん」
きなこ「王凱歌ね...」
李 「どうして私が？」
きなこ「あなたの事、元から聞いたわ。」
李 「そんなくだらない事、調べてたの。...だからどうしたの？彼は今のところ、犯罪者ではないのよ。私が会うことに何も問題はないと思うけど。」
きなこ「彼に何をさせようとしているの？組織に戻るように仕組んだのもあなたなんですよ？一体、何を企んでるの？」
李 「私が？何も。何かを企んでるのは、1 2 1 1よ、そこを間違えないで。」
きなこ「彼の居場所を教えて？」
李 「どうして？知ってどうするの？」
きなこ「もう、彼には人を撃たせない。」
李 「(呟くように)約束...」
きなこ「？」
李 「それで彼の罪が消えるとも思っているの？もう、拭っても拭いきれないほど彼の手は血に塗れている。今更、一人殺そうが2人殺そうがどうってことないでしょう。」
きなこ、平手で李を打つ、殴り返す李。
きなこ「あなたには、彼の気持ちはわからない！どれだけ自分の罪に苦しんでいるか...」
李 「あなたは、わかってるの？彼が何を思い、何を願っているか。...彼は自ら組織に戻ったのよ。あなたの声を振り切って。」
きなこの横をすり抜けて行こうとする李、きなこが腕を掴む、振り払う李
李 「離しなさい。これから王凱歌の母親の救出に向かうんだから」
きなこ「お母さん、見つかったの？」
李 「あなたがくだらない事に首突っ込んでる時に、こっちは、ちゃんと捜査してたのよ。」
李、出て行く。追いかけるきなこ
きなこ「待って、一緒に行きます。」
李 「勝手にすれば」

- 1 2 1 1本部前

車の前に立つ凱歌、携帯をきる。
車に乗り込み、助手席に鞆を置く。カーナビを操作し画面を確認する。
車が走り出す。

- 病院前

車が、数台止まる。降りてくる刑事達
きなこ、李を先頭に病院内へ入っていく刑事達

- 病院内 5 F

エレベーターの扉が開き降りてくる刑事達
襲ってくる1 2 1 1、闘うきなこ李
病室を覗き市江を探す刑事達
呂の声「いました！」
戦いながら顔を見合わせるきなこ李
最後の1人を倒す。

病室

飛び込んでくるきなこ、ベッドに眠る市江

市江の横に立つ、船木と呂

きなこ「課長！いつこちらへ」

船木「今朝だ。君にはメールを送ったんだが」

きなこ「すみません。昨日署に戻らなかったんで...」

船木「(市江の顔を見ながら)薬で眠らされているらしい。無事でよかった。
君のご家族に頼まれていたから...」

きなこ「...」

- 病院前

市江、ストレッチャーから救急車に移される。ドアが締まり、救急車が出発する。

病院から出て来た船木ときなこ、きなこ、李が建物の陰で携帯を見ているのに気付く。

李に走り寄り、携帯を奪おうとするきなこ。争うきなこと李。

李をねじ伏せたきなこ、李の携帯を奪う

奪い返そうとする李、振り払って、携帯を見る。画面、地図上を移動しながら点滅する点。

きなこ「GPS...これは、ホイさん！」

李「返しなさい！あなたには関係ないわ。」

きなこ「いやよ。彼に狙撃をさせるのね。」

携帯をもったまま、走り出すきなこ。

李「(きなこの背中に叫ぶ)もう、間に合わないわ！」

船木の横を駆け抜けるきなこ

船木「円道寺君！どこへ行く」

きなこ、車に乗り込む。

船木「円道寺君！」

走り去る車。